

823
M2N2

紙
以
入
楚

以
何

50

東屋

才五歳

權大納言右大將

私記多六才二歳之秋也

中將君冊宮姫君也

私文姫君者も習君也中將君者年

習君之母常陸公妻也

中將君欲嫁文姫君於尼近少將也

尼近少將梅北常陸公之女嫌之

中人以此事告常陸公常陸領心之

初云尼近殿按察其言式部之云今此

如れ其言はけりといふにけり其言をば

大納言の如くいふに常陸守の書の中へ

如くいふにけりといふにけり其言をば

尼近少將の如くいふに

常陸公十六

中將君奉文於二重院中

後文姫君が申問

姫君秘居二重院西庇之北

中將君於二重院伺見宮中

常陸公解尼近少將於二重院

中將君于二案院君佛物諸事

大將殿第二案院中將君御見事

中將殿中君物諸事

謂彼殿代在此處之由事

大將吳香川某王事

中君傳大將心慈於中將君事

常陸守妻迎車立二案院廊方其父文見答事

中君浴湯給事

中君父文見分君君押對面事

右近君女將君思受事

中宮佛胸痛事人告事

中君父文見中宮給事

中君殿君物諸給事

乳母行常陸殿諸事所振事

常陸殿第二案院侍君君歸事

常陸殿又改事家事

常陸殿詠歌送辭事

宮妃君立三案院詠歌事

秋京大將殿於之儀見新造所堂事

送并尼同宮妃君事

大將折車死歸事見女二宮事

大將遣車於之儀送并尼事

九月十三日大將到三案院送并尼事

引入車事

大將殿侍君君於之儀事

大將殿侍君君於之儀事

大將殿侍君君於之儀事

大將殿侍君君於之儀事

大將殿侍君君於之儀事

大將殿侍君君於之儀事

まゝやふ仲ふと申入ま事と云ふは
 うとあふとふあふと
 是と厚みれ母のふなり
 けれみとふとなくありはむなり

守子氏式年足常改れり多し大守者爲親王なり親王任時
 不知吏勢仍似介爲守の令勘吏勢は介介とちと云ふ
 又南宮与凡人任時止大守任り制と云ふ

裏書云孝隆上野木依王外不任法王の宮に少少
 孝隆前子之子為人式尹思原少納言書
 後波守妻
 已上前段
 為人右近將監量女將妻
 已上中將君段

私中將君ハ別浮五君の如くはハ
常陸の親王にされし守れるとき
ハ外吏勢以下をつとめ
るふしりてみえしと云ふなり

女
子
に
あ
る
最
後
の
一
筆

永亨明君之可
保無此憂

ねは姫君といふ人け巻はかぬれ書よりかし
 是よりよふ人をたれ に 次は此をといふ書に或はとて

王令子龜子玄子

恨之

むはむとておろしき様よ
海女とやうなぬのひ

[illegible]

吳淞之江表

とうちやくとくめくを
家 孝陰分れろとふく

くわんしん

かゝる一頁を巻て色
に同す

よめもれ二三人
前後のみし

あはれ

いふは、
初め、
女
め、
か、
し、
姫君、
れ

終るものごとく物より字ぬれしも又各姫君歟

去る
あはれ
女は
妬み
つゝ
なり
く
と
あ

私に昨君ありて事限ありしを奇れん

角ノ 糸ノ 姫君ヲ 浮ル 玉ノ 子ノ 下ノ 案ニ 子

極少見字

あやふしにわうと

ササナミにみるん

きくきくきくきくきくきくきくきくきくきく

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

あやふしにわうと

これ物ハ曲の物なり

ちかききタラハるふ川のせきめきめきめ

師し 義師通と曰経のうへあり

さふ物ありきり 守のきなり

ねめしき人のしきとほそきなり

母君はそくめゆきと ほふめれぬさふあれき

あこきとらき 吾子 日本紀 我子何子 衆子 幸

あきとほふきと あきとほふきと

かれめちきしきと きりし

たをかぬは八月のきりきり きりきり

月つひきと あふめのめれき

人のこれき あふめのきりきり

ようめき あふめのきりきり

ほふをき あふめのきりきり

たき あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

あふめ あふめのきりきり

多事と懔とあはれなり

いとねくがうそ

くつくと歩け

中ふつていふと

陸のしづな

多岐公方

寺ぬふそつそ

とくの子のねんとも芳史作

後
子
竹
之
を
と
る
し
に
か
り

くはつとん

君いめちやふなふう

[illegible]

まねあういふふ

如
ふ所の解をたにせん事不中とて

ねはあち悔れまゝ今更肌のやゝさうに花さな

らひとふれあふとふりハサの親あそぶあそび

かゝるの事さうしたと眞しくいふと由とさしめざるや否

萬物皆有其理也

あうそ ちうは ちうめ ちうね と ちうそ ちうね ちうそ

文脈を以て解する事ハ外道之を爲す也

みえりてめぬりともんと
まゝにハハぬりしる

常修心と云ふことと云ふことと云ふこと

あつちのうへへ

小のん字をひきい

源如綱を撰改するものなりと云ふ事

友人前夜此舞乃之
糸高子乃

此二人も母を祀るもなれども少将を孝隆歟とす

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

人はいそゝろそゝろかんぞ

追従 イニヨ
及 イニヨ
人

今更に

おぬちのきけしうめは嫌しそと口惜り
由てふれむいふわさ

お年あきし家子とてし

中ふれしとかし

お南坂の中ふれしお監とて中ふれし

いふれしとて中ふれし

おかおの知し ねはあふりつとてし

うしろつれとねはあふりつとてし

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

おれんの人の人とおく

かぬあゝ〜 子れきさ〜

たさかぬ〜 本嬢ノ約

き〜ひ〜け〜なる〜 本子れきさ

の〜ひ〜う〜う〜きさぬかり

ち〜う〜あ〜り〜て 本あ〜う〜れきさ

ね〜う〜ひ〜ひ〜が〜ら〜り〜て〜ら〜う〜居〜う〜て〜と〜い〜初〜れ

つき〜う〜か〜れ〜と〜子れぬ〜ひ〜う〜う〜きさぬかり〜と〜嬢あ〜と

き〜れ〜き〜う〜や〜れ〜ん〜ま〜と〜う〜わ〜り〜て〜う〜る〜ぬ〜

これ月〜う〜れきさ〜 本嬢の約

は〜の〜の〜う〜内〜居〜れ〜ん〜う〜 本厚あ〜る〜の〜

か〜の〜さ〜れ〜後〜あ〜り〜の〜ぬ〜と〜ん〜の〜友〜の〜あ〜じ〜と〜あ〜ふ〜あ〜い〜と〜に

海〜あ〜若〜常〜所〜の〜少〜あ〜は〜実〜子〜か〜れ〜と〜と〜常〜修〜う〜実〜か〜ら〜ぬ〜の〜

う〜ふ〜さ〜け〜う〜と〜う〜る〜あ〜ひ〜ひ 如捧中 掌上珠と云存し

さ〜ひ〜う〜う〜の〜は〜な〜い〜あ〜ま〜う〜ら〜な〜や〜う〜に〜く〜あ〜さ〜く〜う〜け〜り〜れ〜ぬ

う〜て〜ふ〜あ〜お〜う〜と〜あ〜り〜う〜う〜ん〜す 本此がぬのうさ〜れ〜う〜海〜か〜の〜縁〜ひ〜の〜こ〜い〜ん〜と〜さ〜ま〜あ〜

常修み〜あ〜う〜う〜あ〜ま〜う〜ら〜に〜ひ〜り〜あ〜る〜子〜ま〜の〜う〜ら〜け〜

ま〜ら〜う〜て〜海〜が〜ゆ〜を〜渡〜は〜さ〜る〜と〜う〜と〜ぬ〜な〜と〜同〜く〜あ〜

か〜う〜う〜う〜ん〜と〜ぬ〜え〜ん〜と〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜

や〜ら〜あ〜う〜う〜う〜う〜く 本嬢のう〜う〜と〜う〜て

い〜の〜う〜う〜う〜う〜き〜う〜く 本子とあ〜ひ〜く〜う〜う〜

り〜れ〜ん〜う〜う〜う〜う〜に 本将のあ〜さ〜と〜今〜れ〜な〜う〜

弄 娘さ〜る〜名〜を〜う〜う〜う〜う〜と〜う〜う〜あ〜れ〜し〜う〜ひ〜く〜と〜先〜う〜う〜

い〜せ〜と〜か〜ぬ〜の〜え〜う〜ふ〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜の〜を〜偽〜と〜し

本 此や〜う〜但〜嬢の〜う〜ひ〜あ〜や〜ま〜ら〜ず〜か〜う〜く

ま〜い〜あ〜さ〜ま〜い〜も〜あ〜ま〜い〜あ〜ま〜い〜な〜う〜と 中ふ〜あ〜う〜と〜な〜ん〜と〜あ〜

み〜ゆ〜あ〜ま〜は〜ん〜と〜と〜ぬ〜娘〜と〜ま〜く

本 乃〜ふ〜か〜さ〜と〜と〜 本子れ〜う〜

あ〜あ〜う〜う〜う〜の〜さ〜と〜と〜この〜

あ〜あ〜う〜う〜う〜の〜さ〜と〜と〜この〜 男〜女〜あ〜と〜ま〜は〜あ〜は〜は〜あ〜は〜あ〜は〜あ〜

う〜う〜う〜う〜う〜う〜う〜

あそびのうた

中にもよく浮あへ休暑なるうゝと修女も立役のうゝしされは
 人の人よはかう入を居あうあよよくさされうゝとさねし

おのゝちをうけこみ浮あへの世なり

いそゝろあつとつろろ分とろろ下ろろわとろろとろろとろろと

海に舟を乗らる

妹は、あゝ常陸の怪狐のよう

おのゝこ

あはすめとみるむさめし

曼
昨君と什々、商榷し力尽

如
至多不明少將之

人の心

此乃新好漢人

松村の細少町より大井の家まで常陸介の馬で

常侍の位に就くを以て

隆興寺隆かゝの御礼である

又
 田
 心
 い
 ？
 と
 へ
 筆

如
輝
の
り

如煉の刻

子

正實止変し

美実と長谷正とあり

わうんあうんあうんあうん

河内縣志

夢のふ見ふ花とてふのうらふ小燈通ふとてふ色とて

ふくしとせうへんをみまゐりて

孝子之孝

たうがわしめをうけ

弄

一本の君様の如くおとそ家へ来りて

新玄之書多し

とくちうあそびあそびゆゑ
風流なぬこ

実なりとし

もあふいあふあふあふ

思ふしゝもあらず

我知りし

この世にやうなれと

何うと云ふと云ふ

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

いれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

イナこの世にやうなれと

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

花 現はしゝもあらずいふれども一もたつた後れものなり

又云ふれどもさういふれども一もたつた後れものなり

妹のきふかぬより
かぬなり

古記權大納言去年獻贖方中宮

如弄
くらくら何處よりとてよめりき
贖ノ字法てふあり
あゝくら海讀れり

變同く云但刑罰之時法令ありて由とて變同くハ
 守室なりと由て官ありと云

私但是外ハ賤個ナク官ニモ成ルヤ崔烈ト云者沙
貨ヲあて官ナメトハ人ナクモ個具トてナク
ヨク然トナリナキ也云々

そのあはりのほろろに

田んぼ
 ねむのくさ

如浮之とてゆゑにめとるは枝の中をめぐりて
 ちち少れともいふ事とて思ふとかなあは

新
考傳のひそめて今れ少々の後ずればあらうかふふをあらう

秘
嫌の初是と月くひきあなれとてし

此如君を大切にするといふこととよくいふことと

[illegible]

やういふ中々えとら

うまはくしとて、あなをえそむとぬれちつこと

是七癖のいふひ

月比ふさうふのふなふふ

おねのうへは梅の月夜の初はうきなりてしるゝもそふじ
ほ船へふを傳へてはあゝ母のさるやうてとひす
あゝ君もさるやうに少将のふ合とさるやうなり

五
 三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

一上づくとろろとろろとろろとろろと

人をもてせらるる
おのゝまゝうゝに

なとひり 利歟 一 ぬるる ぬるる ぬるる

目とくはくろく
そくろくはくろく

いさけけきまていふおふすゝさうこ下あくらく見しとち
如 ぼあつてゆまを一日とあゝさあひとわしとくふ将の
かろつてすい奥ふんさうこさあはしき
少いさうきふいさねあつて
ねさうきふいさねあつて
如 ぼあたり

かおがしとつあひの人よとせん
はあふなりと母れあかり
ほねれあかり

おやりきつれさうて
おふさなり

おふさなり
おふさなり

かみさきとつあひのあつておふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

おふさなり
おふさなり

うせふもつたてあ〜 用或要し

むようハ用しをなれぬハ〜 用或要し

さの自慢の初

わ〜こころをうたれ〜 少あ〜か〜は〜え〜

か〜も〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜 少あ〜の〜れ〜は〜あ〜ん

〜の〜を〜ら〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜 少あ〜の〜れ〜は〜あ〜ん

あ〜る〜人の〜る〜ん〜と〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜る〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

小の〜い〜れ〜る〜 母の〜は〜な〜と〜変〜れ〜ず〜は〜わ〜く〜す〜し

こ〜ろ〜り〜あ〜は〜 少あ〜と〜な〜く〜

人〜は〜あ〜り〜あ〜り〜 少あ〜と〜な〜く〜

か〜の〜は〜た〜あ〜 少あ〜と〜な〜く〜

け〜れ〜は〜ゆ〜り〜 少あ〜と〜な〜く〜

か〜や〜あ〜い〜も〜あ〜る〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜る〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

人〜と〜あ〜の〜解〜あ〜い〜あ〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

〜と〜な〜れ〜る〜ら〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜 少あ〜と〜な〜く〜

木
卯
九
初
一

如父方し梅子大細云々

紅梅乃此式之ハ
陸路ノヤセ
乃業のわらへ
戊午

水
舟之聲なり

尺とぬゝつとむとのえはくは君ハ

國史云正三位源朝

臣潔姬者、我太上天皇仁女也。母當麻氏、天皇選、得其

入太政大臣正一位勝原臣 忠仁公復 弱冠之時天皇悅其風標

起倫殊勅嫁情和太后其長女也潔姬性能琵琶頗可賞翫

此
 三
 三
 三

萬葉の町はさうにさうなとんとし

あねのうさぎさんと
中子

六五 知得るが如く

月夕そとちうみ
美子あれ母を
八雲九沙市とち

海をかりてつら

江戸のゆかりなく
 常陸の市をゆく

今更妙なりと云ふ

今あるをわきま

名はたふれ下すそとる

一にわたりたてぬるゝひかへ

人々を驚かすことなし
浮世れきとてくさくさ

二あはあやとんあすゝみるよ
義うはあやとんあすゝみるよ

女房あといふとえんひふなり

ちやうどあつてらぬやうと

[illegible]

少々々々々々々々々々々々

集
孝陰介述

浮舟子年とろくろ

あゝとてさういふこと
あゝとてさういふこと

水さうろろろろろろろろろ

あゝきつさしゆをうらふ屏風とてまて

母少而多
子而少
子而多
子而多
子而多
子而多

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

定々事なれど此事とてあらず

奴
い
つ
じ
あ
は
し

義
又海舟と云義あり
死し以上我

弄
 末ノ初ノ子ハ六ノ所ニソカ帝彦の女レヲシカ物ヲモテモんと
 せん人ニ又云浮美と云ハクナ私云浮美ニ成リ上弄

ねは一匹に浮ぬれすときる極よふあまてあまのあひ
 らふふをいふふいふて女れきとてうあ妙なるあま
 の日はあまに見る一物とてあまのあまのあまのあま
 是をいふときふたつにたふすあまのあまのあまのあま

人忠清公

守乃約

此守此

紫々々々

少々今のみとあらふを恨む

よめり人々事なりとて

あゝやうあゝほろい

義とくにほめられぬ

とらぬのや

昇
盤れと云ふ

[illegible]

あまのこゝろはなほあまのこゝろなり

[illegible]

ねちのねのふとふたり小方の

ほゐてさあ

とあるは解とんとおの

魚子丁うねと守れ女うねとさくかの家さん

うねむはふれんうねれあふふう舞う

悦
る
人
の
あ
い
く
舞
ふ
さ
ん
と
り
し
て
あ
ら
う
人

守れよと密嫌ふ事

おとこ君、この方々のいふく

是がねの

少や媒不計ら
 丁なりとれか
 少や

いづいそなわ

そのありてふこと

木
て
ろ
ろ
ろ
ろ

松前より半日舟より登りて回ると云

女君の死

乳

文苑英華

本中

後
方
邦
へ
ま
れ
し
は
あ
を
わ
り
き
り
め
さ
す
を
い
て
い
る

此乃

秘
常修此方力為之
（夏ノ初）

志乃入善と

本方より

夕ろつれもふくれめ人む 母のあれんろつてを

けほみそひふろつてさうわくめり

ふれりきこふつたんと 中君れあうとれを由し

こふれさうりゆうり 中君れん

あまは清浄あまなりしゆし

んろつてまきぬまをせよあふまんと 美も又こふれ清

和とて雨まよあの中君れうけなり

ぬあつてい溢れ世よあまされ

こふろつかりん色 ことなりまきまぬまをけあつて

ちろかりんそふろつてくろく

大浦りめり ぬあぬあなりし

さろやういそいけりぬ 大浦り初し

あまろいとあまけなれぬろつてくろ

八ふれ山件客あつて事といふなり

いしりろくまあまこと 小のふ家屋なり

いぬぬろくろりて 母のふ

ゆろつてはあつてふ 浮みなり

あつて君れん

ふれきろくしう人まことあぬん

あつて嫁娶れはあつてのういふ事とては結構なり

あつてあつてあつてあつて

東海見吾相ふ之意見うつがふあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつていふなりなり

※ 居下てりてあ

お中君人ほふとあつていひのあつて

いふていふふとあつていひのあつていひのあつて

※

中あつていひのあつていひのあつていひのあつて

いふていふふとあつていひのあつていひのあつて

お中君人ほふとあつていひのあつていひのあつて

いふていふふとあつていひのあつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

※ 中あつていひのあつて

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

あつていふなりなり

もうたの〜人〜う〜

孝隆分

あ〜う〜れ〜事〜

も〜れ〜れ〜す〜れ〜の〜

さ〜の〜〜〜

啓〜〜〜

啓〜〜〜

あ〜〜〜

孝隆ち〜〜

孝隆先〜

こ〜る〜

孝隆先〜

う〜は〜

孝隆先〜

う〜は〜

孝隆先〜

あ〜〜〜

孝隆先〜

孝隆先〜

わ〜

孝隆先〜

孝隆先〜

女〜

孝隆先〜

こ〜

孝隆先〜

う〜

孝隆先〜

あ〜

孝隆先〜

り〜

孝隆先〜

り〜

孝隆先〜

ら〜

孝隆先〜

孝隆先〜

か〜

孝隆先〜

孝隆先〜

ん〜

孝隆先〜

て〜

ふ日ふけくおまほひく
ふこれのつらめーたし

まきいのみまにいわやまーく
も明な中まし

にうけぬらうとてうしとたれ
も常陸の解れあひ

も伊勢物語の初し
も伊勢物語の初し

再わける初よきあひ

あまーとてうしとたれと云初し伊勢物語れん、うしとて

私意見抄に花より日休く伊勢物語れん、うしとて

何とてれもまほれん、うしとて

のんつらうといふとてうしとて伊勢よりあひとて

ゆい伊勢物語れん、私意見抄とあひとて

花よりまほれん、うしとて

花北山抄云外衛佐小任意不帯之おしとて次将等鈕上

故を妨仍宿侍之時副旅宿物語持上自余不能持上

蛭蛉日記のひたうとて

なれとてあまれわあきす

うれとてこれとてうれとてのあまれわあき
中まよとてあまれ

再
りけおれとてうしとて

けれとてうしとてうしとて
もあまれとて

かきとてうしとてうしとて
もあまれとて

もあまれとてうしとて
もあまれとて

かきとてうしとてうしとて
もあまれとて

うしとてうしとてうしとて

まうとてうしとてうしとて

再
あまれとてうしとて

あまつとてうしとてうしとて

もあまれとてうしとて

伊勢物語とてうしとて

なうとてあまれとて

もあまれとてうしとて

女君のきく人あるも

女少あれきりりわ

中あれお前

わやむううとそつていひのめ

中あ

ふう人のうやまひ一ほとハ

信ああれ

女あ方れとていつ

中ああれ

いひひかきまはゆあうう

中あ

あ少方中あまきおきてわううとせううと橋姫を

あまそそつとあをたつと

さう山ふくはつとて 中あいふとてあまうはれ山里を

そつとそつとあひめとあつとて山つとてあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

こいああれかりとあま

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

あまあつととあまあつととあまあつととあまあつと

世に女... 中君れ... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

私... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

女... 女... 女... 女... 女...

素足くろくそ色うなると
如中君れつ

まゝにうしろのうしろのうしろのうしろを

是より皆厚みれ松禎と云

物々々々々々々々々々々々

こめにふゆ
巨や死ふゆ
人々なる

[illegible]

しゝに人の空をいあやまして
義大子に似て

今よりあつたは
夢で前の人とわ

大和坂より
所花より色あやみ

いさうとあも君
まふれぬのいふ

えいそきこめ
白堊の條 芳定

いづれにまゝと云ふも
弄舟の文類

句
を
し
る
る

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

ふねなれいほろとあつて

まはらちやよめい入るふ
車いあう程のふ

かきふくしとてわたり
まふくしとてわたり

[illegible]

元々一かゝも
 髪負ノ髪(

三つが尻さくら
三つが尻さくら

恒句

らるるあ
おろろ
に裏より半おろろ

人きけいのなやもふり

あきらまひに
明石中交接し

五
后文乃定之

あつたふしをうたへ

ふまへにそれなりは蓮のまゝ一色

あなをくらふ

句の通事
此の中君なり

白文に
中民に
多し

家より来る人より来る人
義中君の必死

子子子子

白比佛堂と云うて新の
所とし

中ノノノノノ

大君れ事し蓋のくは張虎とし

さういふ世を生き、人はなれると

玉中君の

いふやうであつたが、
名、姓、し、を

美
何處有君人

巾にハミテ、
多岐もいひ
初くするハ
美と称して

神より
つれ
ふ
は
と
実
あ
り
し

双
志実子かひふふふ
し

いふはなれぬはかり

心水石遊仙窟也夕リ

人非木石皆有情

白氏文集

みづからつかうを

中君蓮花

海内之民及多見之

新
志
卷
之
一

は
あ
や
と
ん
ぞ
し
ほ
ま
を
も
後
補
ふ
す
け
る
も
如
き
色
也

を
沖坂のふもとに校舎ありて

君と旅船君の形代少て蓮よもやせんともや

川
うゑと
見
川
うゑ
見
うゑ
の
うゑ

か、れ、ふ、の、い、ろ

海老子市校中と九月廿五

建人元元

如 煮のりし 湯入れし

わがれんを移ひて移して

五前多

も
業の山
半に
も
ま
と
り
と
中
を
れ
終
う
ん
と
ま
り
す

下
女
來
る
ま
る

私花よりよしの佐移ひそて移あふふそとわ

花々々々々々々々々々々々

何れにみえたり

山
山
山

私に力をつけていってほしいな

予の心を思ふに、
此の如きことありと
し

[illegible]

中元節

[illegible]

以爲法之者皆然

弄海無母作之也

蕙人にて知なるれ

幾
付
事
と
く
し
と
を
受
け
る
初
め

二、花のれと葉とをそろひて

人君れ中君一いつのふは似

も浮あよ中君れゆつてれふんとさうし秘のやびりう

人形のさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

人形 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

人形 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

いふ君れ 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

いふ君れ 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

いふ君れ 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

大幣 あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

いふ君れ 五本三 祭祀具 一撫一唸 ツキバク

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

あつたにさうりなりふあふてあはは勝れりてあふと

たかりさるあくめいひまにせし

あうあうて中君れききもてねあかり

中君れりききもていひまにせし

いそなひまにせしききもて 中君れききもていひまにせし

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

いそなひまにせしききもて 中君れききもて

君れりしとトける男といふ事しといひ女にふまふとていふ
け初めしとふ小ありさたて先のこれ蓮のふといひ事と
今さらかゝ母もともありとていふ

わさるふとていふされとありとていふ
あつたふののなるん人ふんそとていふ

えいともえりていふとていふ
あつたふののなるん人ふんそとていふ

うのふとていふとていふ
あつたふののなるん人ふんそとていふ

あつたふののなるん人ふんそとていふ
あつたふののなるん人ふんそとていふ

あつたふののなるん人ふんそとていふ

牛頭旃檀 若有人聞是藥王菩薩本多品結隨喜讚善者是
人現世口中常出青蓮花香身毛孔中常出牛頭旃檀之香

權記 長能五年十月九日於山階寺祥見牛頭旃檀香
力叙りての私小けきとていふ

正法念經云高山之峯多有牛頭旃檀諸天与條羅戰時乃
所傷以此香塗之即愈北山峯回如牛頭故名牛頭

仏のゆゑとていふとていふ

院及びいふ蓮の事と眼系とていふ

とていふとていふとていふ

中君とていふとていふ

とていふとていふとていふ

和董の世といふなり并

今これ世をぬきとていふつてまづ世をぬき

再内親をとり人をもつて 女ニあはれ

世をぬきとていふつていふつていふつていふつて

如 女ニあはれ

是 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

勢ふきなり

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

き 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

は 女ニあはれ

らひと常陸のうらつと建とあそびに
うけりてあそびのまじりて

いふのやうなうらつと 世にうらつと又うらつと

とんとあそびのうらつと 井田

をいふといふのやうなうらつと 井田

これはいふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

車いふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

常陸のうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

細代車なるうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

あそびのうらつと 井田

いふといふのやうなうらつと 井田

九月いづ月づハハいいそそくくととて

を九月、十月、十一月、十二月、

蛭あつたる月なり

あづき月とて
さへ首に
髪ありて
目とえひふ

九月とむひてとて休はる日ありしを
九月といふ月とてむひし

私秘弄はあつて三月と誤へし。又六九月も誤りあり
目録に補ひたるべし。又馬七匹ある也。誤りくして白鹿
うけり。こゝろをとりわすれぬなり。

あはれをいふにあらむものか
いまだいづるをいと　白れ見せうとてなほ新糸のきりと見えし
一尺よりむさびけく屏風をとめて

あふちてハ川邊くハ川のほとり
きつちてハ川邊くハ川のほとり

[illegible]

多
本丁に
一

きんみのゆるがましくれあり物
ほめれ衣裳れ多月なり

同、わてもあがり
 とあがりあがり
 萬
 浮れあがり

自交ぬき
子新糸仕女房とかぬきなり

二、このうちの中づかさんとの
と伴と、きききき

何れもこれのふに
 何れもこれのふに

水とちり

さいふをいふまゝに
人々をわづらふ

中馬の女屠れかふまのくまなはくまを

二 ちんちんし ちんちんし

入る 飲さし せり せり せり せり

見ふぢうるいとお
ふまのれち

ふりうふりうふりう
弄 白文にうなり

美
白ふれうかきやうかきふじはうき

新
 不きしうふしうて

めと人衆の通いぬと
あうらけをあらはすと
あうらけをあらはすと

海島に於ては
 舟より河を穿たるは

ゆきりふふふとと糸多き雪ふり

江戸のやうな町に
 新ふ名のうゝを
 井中島にゆき
 いまもそこの町に

并
申
君
此
中
有
此
方

中君ハゆゑにふりてをまゐりて
 松

あゝあゝこれぞ
あゝあゝこれぞ
中世の事よ

ふれぬ人つゝあきくゆつゝの格をまゐるをし
こころをうれゝゝとあきく 筆字毎れのうき

白文の字母のくろみなり

[illegible]

屏風納袋ふすまのりふく今世このよになるる上うへ衣え須す
但旧記無所見の中を

厨子二階屏風やうれめおれまふ可ともい
 づ人のものゝけをこそ
 糸市おは 笑ふはうそかなれと唯

今信為作書白之於乃之隣子丁未年三月

ほゑれふはたのあまのこふつうとてなをいそぐ
ちとしてふ備ひしよめさうめ

弄

中書のこゝに「女房」とあり、後には「女」に「女」を合し、又「女」と「女」を合し、

[illegible]

物つ 兄をいふやうふかき人よ
 何れにきく

毒
おろし

ふんばり

尺二寸

見

凡此皆一而已
有殺者一而已

久々

今更無所見

此の如く
かゝる書と云ふは

右のふりしうふりしう

女はうねる

海東先生

みちしきと 右をうそふ事
に けくふ

くふいしんくうくまきりやゆらま 右より初し
津新いそくはあひくやめさせりそ 兼右より中君人

くまふあましくなりんそ 兼中君人しんいりそとて

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

あまふてふれと白文のうもあかたれとさうれあふあし

春
山
(

其のたむきとよのち

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

なぐのすゝめ

弄

あまのこゝろのこゝろ

交際

みづはくつといふくいはひめ

花
常
清
風

如帝陰中 宿也 并

字ぬの二巻より四巻まで

その一のふ

浮舟人とのあつたとき、
夜更し

海らゝのちとちとれいふひ后

賀正のし

本
虎
子
の
心
也

張居正上

最
高
之
活
心
方
此
字
亦
多
一
心
之
機
中
一
心
之
機
後
立

古今事

アハカ

とくけし將又君をあいまうが

いづれのすなはちあ

いふはふりかへ

なまじり

乳母の浮腫も亦消る

君は幸う
なれども
わが
あつた
さし

浮舟

私に父の母の考を添へていづるをみる

人々をふれあはせしむるを
せん

いふは、あつと云ふ

中君此いふはあつと欲く

坐忘

萬
のふり浮れふと
ふゆき

志 女 子

かきつゝも月を
終のそはふまて
そへ

何れもふしむるべし

又のかれゝあふふふ

大に振ふと
 徒らに
 子に
 乙
 より
 肉を
 名を
 と

ちんちんおんたつ

弄

伯敬親友信之

利もふありありなり世にあらざる人

長音寺此利也
 子或八成就
 不成就
 子或
 子或
 子或
 子或

牛乳は、無臭で、よくあじうる。これは、
料理等に用ゐる。

天台尺玄如白溪開卷對鏡見後
朱乾不朱乾凡事一以

おれをい人の位よりそれより

人の様子を

海晏堂

浮舟火くさるる乳母の巻

白文名内

四
ち
ん
こ
う
の
ま
ん
じ
り
と
う
あ
ら

門裏へあつてはけふ方れりんりねあふしう門のまじ
 口裏へあつてはけふ方れりんりねあふしう門のまじ

浮舟のなほさくら

を被_レ執_ル事_ニ

うゝのうゝから

此みまふぬ人
 義是まふ人
 人まふ人
 中思ふはふの

人々を以て

旬文のしるすれうよあま

洗髮後首風發二三四

在傳曰辭以沐謂僕人曰沐則心覆則安反宜

乃乃乃乃乃乃乃乃

本
字
毎
日
子
し

いふは地をまゝに
さうして

此个中意欲云云

かたをのりて

麻人乙口十

月尽の地をさへしむ種し

ふつふつがとんと

中 君 へ へ へ へ や ち ち

うんと女房もこれに中をいふといふと

實のこともなく中世の勢なり

夢野久石

あゝくちやあゝさん

天啓元年

ふゆみのこゝの寒うなと云ふは、さういふ差のほかに、えんと

之
中
交
此
之
故

くねる

白乳漿之羹

白^奇みのつゆ 中君のまをて むれんのまをてけふ

高きなりてゆるくゆるく

に
不
実
ま
と
あ
る
事
に

さるふらやうに候へ 白ふぶらふはうらまのまぢ

色見ゆらうもててもささあめうらうらう

や実なるうらもく移る極む性ばんとしきもふくみえ

つらあめうらうとし白性といふ

され君いひてうらうとさうんとも も 是は葉大將れふ

如葉の性びそうひいふもそとれは根れふ人きやう

うらまきさひちめれれうらうとさうらうはうらう

うらうといふそらうやうやめ人きあも い まくさめ

弄葉れん中あうらうとさうらうとさうらう

あひりうらうとさひめらんの人なり 葉のうらめあ

とひけすうらうとさうらうとさう

弄白ふれうのほあさひらうと葉のうらう

とにんれうとさうらう 弄 中君れ知はあめ

いんうらうとさうらう 弄 はあめうらうとさうらうとさうらう

うらうとさう中君のうらうとさうらうとさうらう

あうらうとさうらう 弄 中君のうらうとさうらうとさうらう

中君のうらうとさうらうとさうらうとさうらう

うらうとさうのうらうとさうらうとさうらう

はあめ白れうとさうらうとさうらうとさうらう

け中君とさうらうとさうらうとさうらうとさうらう

い実なるうらうとさうらうとさうらうとさうらう

あうらうとさうらうとさうらうとさうらう

うらうとさうらうとさうらうとさうらう

中君のうらうとさうらうとさうらうとさうらう

中君の髪をほらうらうとさうらうとさうらう

これ君は白うらうとさうらうとさうらうとさうらう

うらうとさうらう

中君とさうらうとさうらうとさうらうとさうらう

うらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらう

弄中君とさうらうとさうらうとさうらうとさうらう

いりやーくゆりてゐるうふ 女のこれとよえぬ
まうふくうーうにんそせもや

ほれ実る事を返してうーとんしめや
いーと世にうりゆふ人そあは

うめあふえをうきゆりゆりゆりゆり
いーやうふあゆれとさめつる君あ

ほれあはゆりうあふり実ーかゆ性まきとんあ
うとあひうんあふあわうーとん

中君はほれかーぬとーうぬ女房とれ
ふれはありーつさあ 女房とれ

ね白れゆああゆりーと
うらぬふあつーした人あーうとあ

白れゆとーとゆふーぬと人あはとゆゆとあ
あーうゆとゆーとまゆい 中君のゆゆ

まゆあつーにゆふにまゆあゆつと 中君れゆ
中君れあゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

あーゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 中君れゆ

まは けり人きいしきあつたりと

耳 浮ぬれゆふなとみ似まつてけりあつたりと

れは けりあつたりと 人君のゆふに似てあつたりと

浮ぬれあつたりと

さきふもなれあつたりと 浮ぬれあつたりと

ゆふに似てあつたりと 今かあつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

ゆふに似てあつたりと 中君のゆふに

あつたりと

ゆふに似てあつたりと 浮ぬれあつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

あつたりと

あつたりと 中君のゆふに似てあつたりと

ゆしこもつてえんま 中馬し
ゆりこもつてえんま 中馬し

上病しあひあひ

手 上病しあひあひ

夕つてあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

あひあひあひあひ 中馬し

ふみんがさ ほかとあとのそふはわんすは

あつひはあつあつ

あつあつとあつあつと 家のすじはなつと

あつあつとあつあつと 曹公

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

あつあつとあつあつと 孝修のんし

如 夜もくくぬきゑる極

かれあつしかながねかりりつ

如 ころおれ白きのもて代ひあなり

如 なるそむれがねとそむれさし

如 部ひえのくされがねとにもの

如 白きあつそむのすなり

如 ぬふあきとえのくしんくね

如 川月影のねもく人きねのあつはきとえ

如 ぬれがねと

如 白きあつそむのく

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

如 ぬきえいれ

めいあう
ちねの
かゝる
ところ
私
あ
れ
す

弄
ありきなりふくしきもあまひうへ

お
あ
う
め
て
め
と

句
れ
す
け
さ
る
る

あなつとやう
はるるる
年
信
毎
日
更
白
ま
れ
と
つ

如くしてこれ等の事をして免れよう

[illegible]

建初不若以名
事以之

萬
 年
 所
 在
 之
 所
 也
 萬
 年
 所
 在
 之
 所
 也

らけいんあゝ尺あるにふたのふた

浮舟の蓋を止む人

[illegible]

女其乃中一五九四〇

弄
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの
いふの

今更しあはれんは見くらけく舟のりくらえうさあ

是も後を以てつるに
は既に業を全うし
て人々の心を安んず
るに

水は花を
弄るを
愛するを
秘するを
むす

かゝれどして
おぼやうに

[illegible]

子之爲人

三
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

蘇
葉ハ少頃ハ二葉成テ多クハ
成リ

葉の女ニ
多かり
事多
少方
此

筆
はあに
母のふ
あに
くら
あふ
と
ふも
人
あふ
品位
あふ

てふふらめりしハ女二文の由ありてふを董のきりる

まきとろをまきとろ

世人の多くは、私に
私と異なり、人の心を
みえぬ

子もとては君の如く

△北方援の子とも常陸の子は浮舟は似てゐる

あねいふれうら
あかにあはれ

れ市和そハ行ろしハ出ろし

蓮のうと浮舟の舟うと

八の如く
二
三
四
五
六
七
八
九
十

★ 乙系の系なり

もろにありたり

并
ふをさぬす

中世の浮世を
あつた

女
白
子
子

れなふ

不得其心猶可了見

不得其心猶可了見今棄宿疾矣

[illegible]

西嶺 / 氣がなふと云ふは

うしあわうはともくし

とて 近用しう 芳子とて ひと

はぬ君を平下してあれを今本の

子之

至云又字云云云云

此乃見此乃見此乃見

7

三ノ

弄
字
毎
て
ぬ
ふ
の
初
秋
美

弄
浮
如
此
也
筆

中子ありてふ

義
奇
玉
わ
へ
し

名々々々々々々々々々々々

そぞろ市小あねわうちん

のわらうと

うらがひ
ほめぬ

アサキとシラサキとヤシ 伝 放侍

うき世はわかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

母れ中侍の君れなりし 母の世なりし 母の世なりし

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

わかれぬ世なりとも思ふはうき世なりとも思ふは

夢
 夢より懐旧のヲバりよりしてとてふとふとふとふと
 ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと

いと多しと 年取らるの節をぞあはれ
かたみづはあときを

一目みるに文なりき
 女形なり
 是は丹波守の方角にたつと
 女形なり

今更に商人をいふは、
今更にかゝるくもめる原
女業の初

浮みれ行くとうまれすこ
うやうなあいぬとれまか
あきあき海をながるといふ

なるといふこと
か
うろたひの物
あここれいふこと
あはれとていふこと
あはれやうとて

八是補陀落山同降土也。魔界彰跡聖衆景向之所也。於彼所

天下之紀像正玄海ありこゝめく世の号より入て十二年少派去其
僞儀帝其苦行とやめく内供奉十福所より補とほき事とや

4

＊河海より空也上人の御引花より下紀傳のものとむつ
りてこそとてみづへに利を方便のふふ山花のふふ事なる
見河海にふふ事なるもあしはふふ事なる利をふふ事
あふ事なることなる

＊河海に抄記するものなり 或本秘事につくものなり
今も記してゆゑなり 或本初

衆生無辺誓願度 四弘誓願隨一也 或本四弘誓願
衆生無辺誓願度 煩悩無辺誓願斷 法門無尽誓願學
無上菩提誓願證

＊人よりみればよくかたとあつてもあつてよくとあつても
れきの法度のなり

＊私にみれば四年の初人となりてこそかたよくあつても
みづひとやうそ人の好いとてかたよくあつてもかたよく
れすふたふとてかたよく

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

＊かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても
かたよくあつてもかたよくあつてもかたよくあつても

伊賀太郎女 中井ノ事 伊賀太郎女 中井ノ事 伊賀太郎女 中井ノ事

一説伊賀太郎女 中井ノ事 伊賀太郎女 中井ノ事 伊賀太郎女 中井ノ事

野干坂伊賀専之拳專 今俗呼老方 漢語抄

＊花表氏の云末勘 土佐日記云 花表氏の云末勘 土佐日記云 花表氏の云末勘 土佐日記云

ふあゝゝゝゝ 牛飼 應神を奉れけりしうゝりて

きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うれぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

如市店し并 如 けりていけりて

弄 終 圓をゝゝゝゝ

き ちのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れ中やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

白まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

如君ハ海也

を
の
あ
ふ
と
多
虎
の
中
君
の
さ
と

如 此 乃 乃 乃 乃 乃

ふくきてなきてさへん

水多リ初歩

水行

秦始皇本紀註云西京賦曰倣道外周十

廬內傳隆宗曰上傳宮外白為廬舍畫則巡行非常死行則發

備不虞也

[illegible]

は崩を象の字に包と續

中 初 玄 象 待 不 之 之 原 祖 求 之 之 在 久 矣 矣

わきより
あまのり
まをた
るるを
告

伊勢物語とてうりえ
つてまゝのやむるは
みち

[illegible]

如
屋
六
家
し
至

弄
家
分
分
分
分
分

私に巴里を見せ奉る。云々此様、
分り易く書く。是れ

宮内省のりともちまゐるをいふことなり

此の車よりハリ

門内入つて来る人々

まゝうゝ多めなり

蘇弄墨川方知

(3)

く

何々面々々々々々々々々々々々々々々々

三つとて一
如き少
あはれも
臨みと見え
なり

きひるのれ

もきむるに里すれりし家なるをひるふりてわ

きけなると云ふをものこせむよなると云ふは
張用只里ひ

とろろ上福

只山里をうづなぐのこがえり

所とひるまを幸に東の
のちうわさうめうさう

久しく感^さぜず^るなり^きを^もつ^て人^をみ^るに^もた^へる^を

めくはるあふみ

子とすてはるるるるるる

[illegible]

四阿新撰系記阿屋須智四屋皇東屋催馬子

廣令云宮殿皆四阿辨色立成之
阿都木夜木夜兩下同

襪色多成玄雨下麻夜和本

葦の袖に追風

人々あつてとふれあふ

て、常陸今わらなれい

董氏之過戶

浮城抄

いんくみそまの煮をくらひてし

戸部式に依る所なり

何れも皆陵子にありては
 祇なり

月乃戸口陽と号す

あゝふはふん強てきくもろく是偶のち。正らふ人

笑々々々

大君孔昭々乎

しるしを以て人の好むを以てす

たゞ之きとてふ

新
何事と云ふか、
こゝろを人の心
にうつす

人々々々々々々々々々々々

私又今更此より後之のうゝを記す如き

るものゆゑに字を以て業の

うづらうづら

人のきくやうきふ

浮城のきりぎりす

たつとまほ

ち後をまじ小虫のふり

狂々々々々々

13
弱
心

花
心
も
此
行
ふ
夢
なり

名のうやてうひとく

也
ふ
へ

あ い う え お か き く け こ さ し す せ そ た ち つ て と な に ぬ ね の は ひ ふ へ ほ ま み め も や ゆ よ

あはれなる鬼にうたがはれし

[illegible]

かきくけこさしすそ

車部曹德詩傳蓬蓬車輪とろろ
蓬葉之車輪の中ろろきり

うみ行紙にて車とゆふゆと
ゆきを車の人行ふれ

まゝに後をゆく人々
 此の秘説あり
 或は裏をかく

まれ居たの長夜に寝たり

此夜の終に皆さ御車の今よりゆき車の中へ移るに
つきよゆきまゆをまよて車よりゆきて女君とい
うひらり車とまよふ川へ入るうへにこれ車ありま
移るうへにゆき思ふようきりゆき上ノ船は移るわ
ういづつまよてたのうへにゆきつたゆきまよわ
まよてまよまよの今よりまよあれたる所へ一荷が
まよれまよ移るいふまよにゆきまよわ
事 女 話しきまよまよの宿へ移るまよゆき
情まよ車よりまよまよまよまよの宿へ移るまよまよ

私花のまよまよまよまよまよまよ

おのいづつまよまよまよまよまよまよ

我 衆行し今を明に候まよまよまよまよまよ

たれまよまよまよまよまよまよ

九月よりまよまよ 女 衆はまよの月より

まよまよまよまよまよまよ

九月のまよまよまよまよまよ

女 衆は九月のまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよ

む 法性寺に貞信と建立しぬくも名をいふ貞信の所植
とあるは法性坊名とて法性寺といふなり
又法性寺といふ所のにともなり
并 法性寺といふ女なり

君といふあまのきき
君といふあまのきき

車の君といふあまのきき
車の君といふあまのきき

車中よりいふとてまは同車よりいふなり
并 法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

又法性寺といふあまのきき
又法性寺といふあまのきき

ゆれはうりてくす後よ

お大君おとし

あつていもう一回あひのくそらうりあつ

お下車し浮みと

うらやをいゆふされんあひしうもて 弄あ

私秘弄箋木の葉一曰くあつて又初つてた大君のかたあやと

ゆうてんあひんとあつああもく いまうりあつてああ

あそく君のうりあつてい ときふれんてされとあつてのあ

はるひきく車うりあつてい

たあをてけはあつてうりあつてい

むるいあつてい

うらあひのうりあつていあつていあつてい

おれはあつていあつていあつていあつてい

わきとあつていあつていあつていあつてい

お大君のうりあつていあつていあつていあつてい

かきあつていあつていあつていあつてい

はるひきく車うりあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

お大君のうりあつていあつていあつていあつてい

お大君のうりあつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

あつていあつていあつていあつてい

是字ぬれ髪のすし大君いさむしあめりしれ
まのゆく〜い〜く〜さ〜
女にまはあ〜く〜人ぬめ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ
はあれぬきまのきんさあ

くふあゝちうて

や一匹の白きん

いふいふれ初ま

焚れにちてう終し

いようちいおれて

大君れふ所あるわさるめ修る

われいふはききうん

琴なりふ事とかなうん

あつものうて

えいさう一の兜ひもひる

や和歌のハリ

ねあひまういづつまて葉のちひうあはつ

あつれいづつまていづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あ

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

あつれいづつまてあつれいづつまてあつれいづつま

